

巨乳ママの甘い罠——仲直りのいけないレッスン♪

巨乳容疑者の甘い誘惑・外伝

新しい夢

それは、彼にとって悪夢だった。

夢の始まりは、父の寝室から帯のような灯りが漏れている所。

息を震わせた彼は音もなく忍び寄り、そっと中を覗き込む。

「あっ……はあっ……あんっ♡ ふふ、素敵ですよ……たまらないですっ……」

そこでは、グラマラスな美女が男の上で淫らに踊っている。

豊かな茶髪を舞わせ、伸びた脚で腰を挟み、両手を指まで絡ませてえぐるように腰を振っている。

その光景に、彼は怒っていた。激しく強い怒りを覚えていた。

——そのはずなのに、彼の視線は女のエロティックな肉体に吸い寄せられてしまう。

特に目を奪ったのは、揺れるおっぱいだった。

男の上で腰を振る美女のおっぱいは、釣鐘型を誇り、背中からはみ出る程大きい。

それがむっちりと上下に揺れている様は、とてもいやらしかった。

女は優し気な顔で男を見下ろし、瑞々しい唇でキスをする。

えぐるように腰を動かし、まろみを帯びたお尻がベッドを波打たせた。

男の情けない声が響き、天を仰いで身体を震わせる。

「……もう、可愛いですわ。本当に」

男をよがらせながら、美女は嗜虐的に笑った。

男は首をすぼめ、おっぱいへとむしゃぶりついていく。

まるで一緒に視界を動かすように、くぎ付けになってしまう。

「……ふふ」

そこで彼は視線に気づく。いやらしい女性の視線に。

彼が覗いている事は、女にバレていたのだ。

金縛りになったように動けないまま、女と見つめ合う。

目を細め、舌なめずりされながら見つめてくる美女と——

翼は、固い決意と共に地下鉄を降りた。
とある地方都市。彼はゆっくりと脚を進めてタワーマンションに進んでいく。
高級タワマンなど、団地暮らしの彼からは縁遠い場所だ。

『土曜日の夜、私の家に来てくださいませんか？』

「……」

（僕は大丈夫だ……）

翼は自分をここに招く事になった声を振り払い、ポケットから鍵を取り出す。
何の変哲もない鍵。このタワーマンションの鍵だ。

一生使う事のなかったはずなのに――

いや、大丈夫だ。僕なら平気だ。決して惑わされたりもするものか。

鍵をかざし、オートロックを解除して中へと入る。

エレベーターに乗り込むと、心臓の鼓動がうるさいくらいに響く。

（今日で、終わりにするんだ……！）

父である資産家の白浜正二が母と離婚したのは、突然の事だった。

正二は万事につけ尊大だったが、家族の事を紛れもなく愛していた。

だから離婚は余りにも残酷で突然で、しかも詰め寄った翼に父は何も答えなかった。
理不尽で歯がゆい時間が過ぎ、父とぶつかる日々が一月ほど過ぎた時。

『明日、新しい妻を連れて来る。お前の新しい母さんだ』

『なっ……どういう事だよ！』

その言葉に、翼は全てを理解した。

――父さんが浮気をして、身勝手に母さんを捨てた。僕たちを裏切ったのだ。

（こんな結婚、台無しにしてやる。壊してやるんだ――！）

翼はそう決意し、「新しい母さん」とやらが来る日を迎えた。

家の大きな扉が開いた時、翼はとびかからんばかりの勢いでいたのだが――

『初めまして。玲子と申します』

『……っ？』

『よろしくお願ひしますね。翼さん』

翼は、彼女を見て固まっていた。

「新しい母さん」――比奈玲子は、翼の想像よりずっと若くて、美しい女性だったのだ。

*

玲子が資産家の正二をその肉体の虜にして、翼と母から全てを奪ったのは一年前の事だ。そして正二は事故死。ほぼ全てを若き未亡人が引き継ぐ事となった。

無論、翼は玲子を疑った。だが味方だったはずの人は次々と玲子の虜となり、翼と母を崖へと突き落とす手伝いをしたのだ。

翼にとって最後の希望は、唯一彼に耳を傾け共に玲子を追っていた若き刑事、城田壮だけだった。

だがその彼までも玲子の美貌とおっぱいを使った甘い手管に絡めとられ、墮ちた。翼が玲子の家に来たのは、壮が裏切ったからの事だった。

*

指定された号室の前に立ち、息を吸ってからインターホンを押した。

幾度想像した事だろう。あの女が外の世界に恋々とした未練を残し、項垂れて出てくる瞬間を。それが、今や全く変わってしまった。

でも——決してあの女の思い通りにはさせない。

足音が聞こえた後、そっとドアが開いた。

「いらっしやいませ、翼さん。来てくださって、とっても嬉しいです♪」
(うっ……)

覚悟を固めていたのに、その顔に思わず釘付けになっていた。

本当に嬉しそうな声で、邪気を感じさせない笑みを浮かべた出迎えだった。

比奈玲子。

小さい顔は天女の笑みを作り、透き通った目鼻は凛々しく、目の下の泣きホクロが艶かく光る。豊かに波打って腰まで流れる茶髪は甘やかだった。

袖のないベージュのニットシャツに、青のタイトスカートは大人の色香を漂わせている。すらりと伸びた白い腕は長く、ドアノブにかかる指は細くて美しい。

尻はまろみを帯びて、むき出しの脚は色香を匂わせてくる。

十人が十人美女と呼ぶ女は、さらに言えば美女の前にその「特徴」を表すべきで——

「どうしました、翼さん？」

「……な、なんでもありません」

意識して冷たい声を出し、玲子の甘い言葉を断ち切る。

ようは肉体のラインが丸わかり、童貞にはドキついファッションだったのだ。

暴走しそうな性を孕むしかない青年、少年にとって垂涎物のグラマラスで。特に——

(お、おかしな事は考えるな！ もうここは玲子の家なんだから！)

うるさい本能を殺し、キツと玲子を睨む。

「……来たくて来たわけじゃないですから」

久しぶりに交わした声は、しっかりと力を保っていた。

「もう、怖い顔をしないでくださいな。せっかく久しぶりに二人きりになれましたのに」
玲子は、まるで子供をあやすように首を傾げて微笑んでくる。

拳を握りしめたが、もう一度深く息を吐き冷静さを取り戻そうとする。

「さ、上がってくださいな、翼さん」

玲子は翼を促し、スリッパを出してかがんできた。

たゆんっ……

「っ……!!」

「あら、どうしました？」

「な、なんでもありませんっ……!!」

翼は吐き捨てるように言うと、スリッパを履いた。

(も、もう……!! 何してるんだよ、僕!)

慌てて目を逸らしたが、焼き付いた光景が頭から離れない。

どうしても、美しい継母のソコに視線が吸い寄せられてしまうから。

美女の前につくべき、彼女の「特徴」――

――おっぱい。

シャツ越しに、はっきり形と大きさがわかる巨乳。

パツンパツンにはったニットとため息を呼びそうなくびれが、肉感的な姿を見せつけて

きていた。

柔らかな笑みと合わされば、どこまでも沈み込んでしまいそうになる魔性の園。

今もニツトの下からI字に実った白い乳房が浮き上がってくるようだ。

アルファベットで言えばHやIの列に入るだろう。

大きくていやらしいおっぱいを持つ巨乳美女が、翼の恨む女だったのだ。

男にとっては、この上のない罠に満ちた肉体――

「さっさと入りましょうよ」

「ふふ、わかりましたわ」

翼は冷静になるため目をつむったので、自分を見ている玲子がクスリと微笑んだ事には
気づかなかった。

*

室内は予想通り広がった。リビングは手前に食事用のテーブル。奥には大きなテレビとソ
ファがしつらえられていて、なお余裕があった。

ソファに通され、腰かけた玲子と向かい合う。

「……一体、どうして僕を呼んだんですか」

翼の冷たい視線が玲子を射抜く。

ここからは悪女との心理戦、戦いなのだ。

この優しい女性には父さんをたぶらかし、刑事さんを甘い誘惑で返り討ちにした。弱味を見せては行けない。

一方の玲子は柔らかな微笑みを浮かべ、紅茶の入ったカップを傾けていた。

「どうしてって……あれから時間が経ったのに、何もお返事をしてくださらないんですよ？ そろそろお返事をお聞きしたいと思ったんです」

返事——壮の「調査結果」を見ながらの通話で、玲子が提案してきた事。

「翼さんは私と正二さん、そして刑事さんの間に何が起きたのか……〈確認〉していただけますか？」

「……………」

心臓が、強く脈打った。

〈確認〉——玲子が壮や正二に何をしたのか確認すること。

これだけ言えばおかしい話ではないが、玲子が提案した条件は、翼自身のペニスを用いる方法だ。

艶やかな巨乳美女が、何をして父を虜にしたのか。そして彼女を悪人だとわかっていたはずの若手刑事を返り討ちにし、彼の股間にどんなテクニクを施したのか。

それを翼自身がペニスを提供し、股間で確かめる事——

「——受けるわけがありません」

一瞬の沈黙の後、玲子を睨みながらはつきりと口に出した。

翼は玲子を憎んでいた。そして同じくらい、誘惑に負けた父を憎んでいた。自分と母を簡単に捨てた父、母と共に築いた物を全て差し出した父を。

「父さんは……貴方の罠にハマってしまった。それは、認めるしかありません」
だが、それだけの話だ。

僕までが玲子に従う必要なんて、これっぽっちもない。

「だからって、僕が乗る必要はありません。父を殺した貴方の誘いに！」

「もう。それは誤解と……いいえ。何でもありません」

火の出るような翼の視線に、色香に満ちた継母は微笑む。

「翼さんには、取り繕っても意味がありませんね。疑いが晴れる事はないでしょう」
悲しげに眉を歪める玲子に、思わず吸い込まれそうになる。

それを厳しく叱咤し、翼は口を開いた。

「……刑事さんが僕に送ってきた『調査結果』。あれを広められたらまずいと思いませんか」
カップを持つ玲子の指が止まる。笑みがそのまま固まる。

「いくら貴方だからって、外を歩けないのは困りますよね？」

「それは……」

「僕はアレを外に広めません。だからもう……僕たちに関わらないでください！」

それは翼の決意だった。

これ以上、この女と向き合うべきじゃない。刑事さんも負けてしまったんだから。

刑事さんから届いた『調査結果』は、期待したものとはかけ離れていた。あれは刑事城田壮の、玲子に対する完全敗北宣言だった。

あの中で刑事さんは股間を玲子に明け渡し、彼女の大きなおっぱいでチンポを挟まれながら、何度も何度も――

僕だって飲み込まれかけたのは事実だ。でも、違う。僕は違うんだ。

今も玲子の瑞々しい目鼻と唇、撫でやかな肢体、そのすべてが艶めかしく映る。

それに……むっちりとした巨乳と見事なくびれ、引き締まった臀部の織り成す匂いたつような美女の花香は、「オス」の部分強く刺激してやまない。

でも、僕は違う。

だからこそ、翼は決断した。踏みとどまれたのだ。

勝利を捨て実利を得る。これが今、僕に取れる最良の判断だ。

さあ、僕は決断した。貴女もまた諦めろ――！

そう思って、玲子を睨みつけた。

「……ふふ、そうですか」

「……？」

だが、継母の反応は予想とは全く異なっていた。

真正面から断ったはずなのに、意に介していないような柔和な笑み。

「なんですか、何がおかしいんですか!？」

気づいたら、叫んでいた。

玲子は黙ってテーブルの端にあったスマホを手に持ち、タップした。

「忘れておりました。決める前に、これを一緒に見ていただけじゃないでしょうか？」

言葉と共に、リビングの大きなテレビが沈黙から目覚める。

玲子は柔和な笑みのままだったが、瑞々しい美貌が冷たく凍っていた。

「な、何を……」

翼の背筋に震えが走った時、テレビの画面が移り変わった。

「――あ」

映し出された光景に、凍り付いた。

そこは団地の狭い一室。ベッドと勉強机、本棚があったら満杯になってしまうごくありふれた部屋。机にはノートパソコン。

見慣れ過ぎた光景の中に、見慣れない男が一人。

アングルは多岐に渡り、机の下から椅子に座る人物の股間を覗くような物。横顔。さらには天井からもあった。見慣れた人物なのに、どうにも見慣れない。

――当然だ。だって人間は、自分の後頭部を見る事なんてないのだから――

「……なんですかこれは!」

映し出されたのは、翼の部屋の盗撮映像だった。

「とある方がくださったものですよ。翼さんが決める前にぜひ確認してくださいと」

(刑事さんか……!)

とある方——人しかいない。あの裏切り者だ。

「こんな犯罪ですっ！ いますぐやめてください！」

「落ち着いてくださいませ。ぜひ翼さんと見て欲しいと言われたんです。翼さんと私にとつて、大切な事が映っているそうですよ？」

玲子は立ち上がると、宥めるように翼の横に座る。

「ね？」

甘い笑みに、拒もうと思っても力が入らない。緊張がいや増すだけだった。

翼は盗撮されていたのだ。かつて信頼していた裏切り者の手によって。

画面の中の少年はそつとドアの外に顔を出し、家に母がいない事を確認している。

「っ……」

これは——このままじゃまずい。この空気。絶対僕は「アレ」をした時だ。

もし撮られていたら。いや、撮られている。

翼が孕んでしまった、人には絶対に見せられない暗部を。

「……だ、だめ……」

「大丈夫ですよ。私も一緒に見て差し上げますから」

玲子の笑みは、嫌になるほど優しげだ。

違う。この女にだけは見られちゃいけないのに——!

(あ、ああ……!)

先ほどまで意志強く継母を罵っていた少年が、心臓の鼓動を抑えられなくなっていた。

『会った時に、間違いを起こさないように』『これは必要なことなんだ』そんな風に言い聞かせ、どうしてもやめる事が出来なかった「アレ」。

玲子と会う前の「対策」。

心臓の鼓動がうるさく響き続ける中、無常に映像は続く。

扉を閉め鍵をかけた。机の上にあったティッシュボックスから四枚、音を立てないように引き抜いて——

『……はぁ……っ』

映像の翼は、そのままズボンを脱いだ。

パンツも一遍に脱ぎ捨て、半分勃起したペニスを外に出す。

「まあ……ごめんなさい翼さん。そんなつもりはなかったのですが……」

わざとらしい驚いた声に、言葉が出ない。

「翼さんも、オナニーをされるんですね」

「っ……!」

(あ、ああ……!)

横からの驚いた声に反応できず、ただ顔が赤くなっていく。

椅子に座りなおし、パソコンをクリック。

「や、やめて……」

思わず懇願してしまったが、玲子は意に介さなかった。

映像の中の翼は、あるファイルを起動した。

「あらあら。こんな事が……」

玲子がわざとらしく声を発す。

翼は心臓を凍らせたまま、目の前の光景を見るしかなかった。

〈ふふ、撮影開始ですよ。刑事さん〉

パソコンの画面に、大きなおっぱいを露出した玲子が映し出された。

むっちりとした白いおっぱいが、壮のペニスを挟みつぶしている映像。

〈くうっ……はあっ……は、はいっ……〉

玲子の指に合わせてむちむちと乳房がたわみ、赤く腫れたペニスをズリあげていく。

『あっ……こんなっ……』

そして、画面の中の翼がペニスを扱きはじめた。

逆手でゆっゆりとカリ首まで扱き上げ、片目を閉じながら歯を食いしばっている。

〈玲子さん。貴方は正二さんにも、こんな事をしていたんですか？〉

壮がペニスを挟まれながら、屈辱の取り調べを始める。

玲子にはっこりと笑いながおっぱいを揺さぶり、新米刑事のペニスを苛めていく。

『あぁっ……はっ……僕う……』

壮のペニスが玲子の大きなおっぱいに潰される度に、翼は背を反り上げてだらしない声を上げている。

ペニスが亀頭をつぶされれば亀頭を指で挟み、根本をズリ立てられれば竿を扱く。

『ま、負けるもんか……あ……』

ギシギシと椅子が鳴り、翼は涎を垂らしていた。潤んだ目で画面を見てペニスを扱く。

そこで玲子が今の翼を振り返り、悲しげに囁いた。

「翼さん……刑事さんの調査結果を見て、オナニーされていたんですね」

翼は、顔を上げられなかった。羞恥心を通り越して、このまま消えてしまいたかった。

「ねえ、教えてくださいませ？」

玲子は微笑むと、さらに密着してくる。

「うっ……あぁっ……」

ついさつきまで拒めたはずの手を払う力が、無かった。

むにゅんと、ニット越しの乳房があたった。さらに、頬に手を回される。

抵抗出来なかった。

玲子は、まるで恋人のように脚をすり寄せてくる。甘い香りが髪から漂い、肉体の暖かさが伝わる距離。

匂い立つようなその肢体をびったりと横に感じる。

翼の息は、荒くなっていく一方だった。

言葉での屈辱と甘やかな肉体の感触に挟まれて、思考がグラグラと揺らいでいく。全身をこわばらせたままの耳元で、甘く囁かれた。

「翼さんは、大嫌いな私を見ながら……オナニーされていたんですか？」

「……はあっ……あっ……」

ぐにやりと翼の顔が歪み、玲子の笑みは優しく光る。

それは玲子による取り調べだった。先ほどまでのつばぜり合いが崩れてしまった瞬間。

『あっ……あはあっ……』

自らへの裏切りを告げるように、映像の翼の喘ぎ声が響く。

画面から肉の打擲音やだらしなない壮の喘ぎ声がするたびに、翼も喘いでいた。

盗撮された映像の中、いやらしい巨乳悪女に、青年と若手刑事が一遍にやられている。

先ほどまで面罵し、嫌いだとすら言い切った玲子のおっぱいを凝視しているところを見られている。

顔から火が出る、魂が零れていくような気分だった。

「へんひゃああっ……これっ、すごい……」

『ああっ、だめだめえっ……』

壮のペニスバキュームを施され、同時に翼が自分の指で亀頭をよじりまくる。

「ほおら。翼さん？ 黙っていてもわかりませんか？」

隣にいる玲子がくすぐるように手を蠢かす。

広げた指に、ゾワリゾワリとももが撫で上げられた。

羞恥と屈辱に濡れているのに、その指の感触はたまらなく甘かった。

「教えてくださいね、翼さん？」

「それはっ……うう……」

耳元で囁いてくる玲子を見れば、すぐそばにおっぱいがある。

（う、あ……）

こんな状況なのに、視線が吸い寄せられてしまう。

魅惑的なくびれと合わせて、ため息が出そうな程美しい曲線を描いた巨乳。

すぐ側に、あのおっぱいがある。むにゆりとたわんで形の良さを誇っている。

口を半開きで胸元に視線を注ぐ翼を見て、玲子は微笑んだ。

そして視線をある一点に落し——唇を歪めた。

「まあ翼さん。これは何ですか？」

「あ……」

クスクスと笑いながら、玲子が翼のズボンを指さしていた。

その先で、欲望をもたげた翼のペニスガテントを張っていた。

玲子の指がぎりぎりを泳ぎ、笑うように盛り上がるの縁をなぞってくる。

「もしかして、オチンチンかしら？」

「ち、違いますよっ……！」



咄嗟に、ありもしない否定をしてしまう。

そんな少年のほつれを、艶やかな悪女は逃してくれなかった。

「まあ、本当に？」

玲子は舌なめずりをする、そのテントを包むように指を這わせてきた。翼が思わず息をのんだ時、指が蠢いてきた。

キュツ……

「んあっ……」

甘く、こそばゆい感触。

微笑んだ玲子の指が、テントを確かめるように握ってきていた。

「ふふ、これ……違うんですか？ とってもオチンチンに似てますよ？」

「だから、本当にちがつ……あっ！」

「本当に？」

キュツ、キュツとリズミカルに、形を確かめるように握られる。

竿の太さを確かめるように竿を握られ、耳に囁き声と垂らされる。

「ここが根本で、竿みたい。ほおら……」

根元から挟むように握られ、カリまで指が滑ってくる。

甘い痺れが流れ、思わず翼は首を振った。

認めたくない。認められない。その気持ちの前に出すぎて、頭も身体も動かない。

「こことか、オチンチンの先っちょみたいですよ？ 違うんですか？」

テントの頂点を突かれながら笑われているのに、なぜか痺れてくる。

「ち、違いますっ……！」

「そうかしら？」

意地の悪い声と共に、ズボンの真ん中を抉るように握られた。

——グニユリ

「ひああっ……」

袋まで甘い指先に捕まり、切なげな声が零れていた。

(僕、ああ……これ、玲子に……)

翼を見つめる悪女の顔が、愉しげに歪んだ。

「それじゃあこれは、オチンチンではないんですね？ ふふ……」

そのまま玲子は、ゆっくりりと手を動かして、ペニスと袋を揉み回し始めた。

「あ、ああっ！ だ、だめっ、待って……！」

思わず懇願してしまったが、美貌の継母は首を傾げて訝ってくる。

「じゃあ、これはなんですか？ ちゃんと教えてくださいね？」

(あう……そ、そんなあっ……！)

グニユグニユと股間を揉まれながら、翼は歯噛みした。

玲子の指使いは、自分でするのは比べものにならない甘さだった。

袋を押されるたびにカウパーがこぼれ、亀頭を愛撫してくる手つきにじわじわと染みが広がっていく。

「あらあら……濡れてきてしまっていますよ？」

翼はとっさに歯を食いしばったが、微笑む玲子はカリ首こと亀頭を握ると、キュツとひねってきた。

「ひあんっ?!」

ビクンと体を脈打たせた直後、隣から嗜虐的な笑いが響いてくる。

「もう……翼さん？ 本当に違うんですか？」

「っ……」

——ペニスだ。そう認めればいい。でも……でも、そんな事絶対にしたくない。

玲子の家で、玲子で勃起してるなんて認められない。

翼が屈辱と羞恥で煩悶する間も、玲子は竿を握ったり袋をよじったり、亀頭を無遠慮に押し回してくる。指使いにパンツが擦れて、快感がいや増してくる。

腕はびったりと絡められ、むっちりとした脚が吸い付くように交わってくる。

ニット越しのおっぱいが翼の胸でたわみ、口をわななかせてしまう。

「教えてくれるまで、続けてしまいますからね？」

「っ……くうっ……」

玲子の声はあくまで優しく、余裕すら醸していた。

悔しいのに、玲子の柔らかい指先の感触に歯を震わせてしまう。

膨らんだ股間を人差し指で押し込まれる。

優しくクニクニと焦らすように振られて、顔が震えるのを止められない。

(ぼ、僕っ……どうしたら……！)

必死に頭を回したが、股間からの甘い響きに、思考はまとまらなかった。

「大丈夫です。翼さんも刑事さんみたいに……オチンチンで確かめてもらえればわかってくれます」

「……そうだよ」

画面の中の己を見て、隣に座る玲子が笑みを浮かべる。

耳元に艶めいた唇を寄せると、そっと囁いてきた。

「大丈夫です。翼さんも刑事さんみたいに……オチンチンで確かめてもらえればわかってくれますわ？」

見つめられながら、亀頭を摘まみ回された。

「ひあっ……！」

「ね？ 翼さん？」

その囁き声と指使いにゾクゾクと背筋が震え、涎がこぼれそうになる。

(僕、あの時の刑事さんと同じ事を言われて……！)

ペニスがズキズキと疼く。心臓が震え、熱っぽい息が鼻から抜けていく。

甘い指使いに、マグマがせりあがってくるのが止められない。

「きつと今もこの映像を見たら、翼さんはオチンチンを勃起させていますよ。刑事さんと一緒に、私のおっぱいをチラチラ見るのが大好きな男の子ですもの……」

「うあ、だめっ……」

映像の声に、とっさに首を振ってしまった。

そんな事言わないで。今、言われたら――

「だが玲子は震える翼を見てクスクスと微笑むと、おっぱいをたわませるくらいに押し付けてきた。」

「あ……」

ニット越しの柔らかい感触に全てが奪われてしまう。

翼の視線を捉えた玲子は、そっと微笑んだ。

「きつと今も、翼さんはオチンチンを勃起させていますわ。だって刑事さんと一緒に、私のおっぱいをチラチラ見るのが大好きな男の子ですもの……」

むにゅりと、押し付けられたおっぱいが揺らされた。

(ああ……す、すごいっ……)

ムニユムニユと甘い感触に酔わされた所に、根元から扱かれる。

「う、あ、あっ……」

ズボンと切なくこすり合わされる快感に、思わず我を忘れてしまった。

「さ、翼さん。いいですよ？」

耳元で囁かれながら、ズボンの中心を何度も揉みほぐされる。

(あああ、だ、ダメ……)

腰を震わせているのに、力が入らない。されるがままに、口をわななかせてしまう。

「んっ……あああっ……!!」

翼は玲子に見つめられたまま忘我の表情で見つめ合い、思考を真っ白になったまま視線をさ迷わせていた。

このまま、玲子にイカされ……

「……あ、あああっ！」

——だが、ギリギリの所で屈辱を思い出した。

「まあ、翼さん？」

「っ！」

翼は立ち上がっていた。

現実を拒否するように、脱兎のごとくトイレへと駆け込んでいく。

音を立てるのも気にせずトイレトペーパーを巻き取って、己のペニスを包み込んだ。

「あっ……あはあっ……!!」

脈打ちが始まったタイミングは、同時だった。

トイレの前、立ったまま翼は腰を震わせる。

(ああ、くそおっ、ちくしょうっ……!!)

歯を食いしばって止めようとしたが、もう腰の震えは止まらない。

翼の覗き込む前で、まるで敗北の証みたいにくドクと零れていく。

(なんで、止まらないんだっ……)

もう快樂はないはずなのに、オナニーより大量の精を注いでしまう。

玲子の囁きと肉体を思い出して、ペニスの芯が疼き続ける。射精の甘い瞬きに、身体が包まれ続けた。

嫌悪感と罪悪感を覚えながらも、ペニスの脈打ちを止められない。ここは玲子の家で、僕は玲子にされていたのに——!!

「くっ……うっ……!!」

結局、敗北感と共に大量の精を出すしかなかった。

守れた矜持と言えば、玲子の前で射精しなかった事くらいだろうか。

息を落ち着け汗が引くのを待ちながら、翼は震えていた。

もう玲子の悪事を暴くのをあきらめたのに。それなのに、どうして……

「翼さん？ 私はリビングで待っていますからね？」

「っ……!!」

敢えて何も触れてこない玲子の声に、返す言葉がなかった。どうすれば良かったのか結論は出ないまま、翼は必死にズボンの染みを拭っていた。

*

「僕に……どうしろっていうんですか……」

聡明な少年はリビングに戻った後、そう絞り出すしかなかった。

一番見られてはいけない相手に見られてしまった恥部。

「大丈夫ですよ。この映像をどうしようというわけではありませんもの」

継母の優しい笑みと言葉は、しかし言外にたっぷりと意味を含ませていた。

もしこの映像が出まわったら……？

対外的にはなんとかなるのかもしれない。人間としての尊厳は地に落ちるが、玲子の映像と僕の映像。痛み分け、いや——玲子の方がダメージが大きいはずだ。それに、少なくともあの裏切り者を終わらせる事も出来る。

でも……

——この生活が性に合ってるわ。健康で静かに暮らせれば十分。翼に何か起きないでいてくれればそれで十分なの——

母さんの心はどうなるのだろうか？

何もかもを奪っていった女を見て、僕がオナニーをしていたと知ったら。

厄介なのは、あの裏切り者がどれだけ手を回しているのかわからない事だ。母の安全や友人にかかわる映像も激写しているかもしれない。

(母さん……)

きっと、事件が解決する前に母さんの心は壊れてしまう。

壊れてしまったら、解決する意味も何もかもなくなってしまう。

刑事の裏切りによって、隠していたはずの恥部を握られてしまったのだ。

「っ……」

このまま終わるはずだったのに。拒否して終わるはずだったのに。

僕は弱みを見せていないはずだったのに。悪くないのに——

「落ち着いてくださいな、翼さん」

敗北感に満ちる翼に、玲子はそっと一枚のカードキーを差し出してきた。

「これは……どうして！」

翼は、目を見開く。

この悪夢に呼び込まれた時とは違う、見覚えのある物。

「翼さんも持っておくべきものですか」

「貴女が、奪っていったんじゃないですか！」

それは、『白浜家』の鍵だった。

玲子に奪われたものの一つ。かつて築いていた幸せの象徴だ。

「なんで、なんで今更っ……」

「私と、〈家族〉になっただけませんか？」

「か、家族……？」

玲子は微笑みながら頷いた。

「ええ。家族がバラバラなんて悲しい事ですから。少しの間だけで良いんです。私を翼さんの『ママ』にしてもえませんか？」

——良かったら、ママって呼んでくれませんか？

それは玲子と出会った時からの言葉だ。この女と、『家族』になる。

そんな瞬間は訪れてはいけないし、訪れるはずもなかった。

だって玲子は、出会った瞬間から悪女だとわかっていたから——

なのに、玲子はそのお試しをしようとやっているのだ。

一つの家族を壊したくせに、自分の望むソレを作りたいと言っている。

「数日だけ、私を翼さんのママにしてください。私がママだったら翼さんがどんな日々を送られるのか——それを知ってから決めていただけませんか？」

玲子は微笑んだままだった。

だがそこで何が待っているのか、言われなくてもよくわかる。

確認を拒んだはずなのに、もっといやらしい罠にハマり込んでしまったのだ。

——玲子と家族になる。玲子を、『ママ』と呼ぶ——

「それが終わったら、私も翼さんも見られたくないものは隠してしまう。悪いお話ではないですよね？」

「っ……」

心臓の音がうるさい。うるさくて仕方がない。

でも、もう頼れる人はいない。父さんは亡く、部下たちは離れ、刑事さんは墮ちた。

この女から、母さんを守ることが出来る方法は——！

苦痛に満ちた沈黙は、実際の所一分もなかっただろう。

「い、いきなり家を空けたら……」

「任せてください。それはママが準備して差し上げますから」

もう、『ママ』の地位を篡奪しようとしている。始まっているのだ。

ルールが敷かれてしまっている。

翼は必死に思案した。何かこの罠から抜け出す手はないか。方法は残っていないか、挽回する事は出来ないか——！

翼の混乱に満ちた沈黙を、玲子は優しい笑みで待っていた。

余裕と優雅さすら漂わせながら。

「……か、母さんには絶対に、絶対に言わないですねっ？ 言わないですよね！」

結局、そんな役に立たない条件を確認することしか出来なかった。

口惜しさに何度も歯噛みしたけれど、何も出てこなかった。

「嬉しいですわ、翼さん。もちろんですよ」

待っていたような満面の笑みと共に、玲子は首を傾げて微笑んだ。

「お約束します。何も残しませんし、残りません。ママと翼さんだけの秘密になりますよ」

カードキーを手に取ると、翼の手を引いて包み込むように握らせてくる。

優しく、甘い手だった。

「さ、受け取ってくださいいな。翼さん？ 受け取ったら、指切りげんまんしましょうね？」

「……」

一体どれだけ固まっていたのかよくわからない。

気づいたら翼は、自分の手がカードキーを受け取っているのを見ていた。

こうして翼は、家族の幸せを壊した悪女と偽りの家族を演じる事になった。

*

「刑事さん、ありがとうございます」

『はい……お褒め頂き、光栄です』

夜。静寂が支配するリビング。バスローブ姿の玲子が微笑みながら電話を掛けていた。

ゆっくりと湯舟に身を預けた後、ワインセラーから白を取り出す。

その全てを男から献上させる事で実現した玲子は、この生活が質素と呼べるだけの財産をすでに築いていた。

だが今日はひとときわ傾けるグラスに美味を感じる。やっと最後の少年を招き入れる事に成功したからだ。

本当に、可愛かった。待ち望んだメインディッシュを味わう事への悦びに満ちていた。

壮に危険を冒させた映像は実に役に立ち、母への想いとオスの欲望に挟まれた童貞少年を絡めとる一手となったのだ。

〈初めまして。玲子と申します。よろしくお願ひしますね、翼さん〉

いまだ忘れない、初めて挨拶した時の翼の表情。

玲子も驚いていた。あの成金男にこんな「素敵な」息子がいたとは。

あれから翼は彼自身が持つ聡明さ、純真さを武器に玲子の前に障壁として立ち続けた。

肉感的な誘惑に負けていく男たちの中、ただ一人玲子を阻み続け、壮を招き寄せたのだ。

おかげで今回のゲームは危機的なスリルを伴うものとなってしまった。

でもそんな彼を、ついにお招きすることが出来た。

翼さん自身を、私のカラダに招き入れる事が――

思わず笑みを溢してしまう。やっと二人っきりの時間を貰えた。

『玲子様。一つよろしいでしょうか』

「はい。なんですか？」

『仲直りと仰っていましたが、翼君とは、その……』

「ああ。そのことですか？ 仲が良かった事などないんだから、仲直りではない、と」

玲子はクスリと笑い、言葉をつづけた。

「それは間違っているんです。翼さんと私はお互いを思い合っていた時があつて、翼さんも仲直りしたがつているんです。意地を張って気づいていないだけですわ」

『気づいていながら……』

「ええ。刑事さんと同じように、私の無実をわかっていたのに意地を張って。ですからちゃんお話すんです。ね？」

『ああ……はい……』

溶け落ちそうな声に、電話の向こうの刑事の表情がわかる。

もはやそこに、玲子と敵対していた時のプライドや使命感のかけらも残っていない。

「そうそう、もう一つお願いごとがあるんです。きちんとかこなしてくださいましたらご褒美にレッスンを差し上げますが……どうしますか？」

その問いかけへの答えに、ためらいはなかった。

『やらせていただきます。なんでしょう、玲子様』

「ふふ。ありがとうございます、刑事さん」

それからしばし、玲子の指示だけが部屋に響いた。

通話が切れ静寂が支配した部屋で、魔性の美女は一人微笑む。

あとはあの子だけ。素敵な素敵な翼さんと仲直りが出来れば、ひとまずこの最高の遊びも完成。もっと愉しく過ごすことができる。家族をもとに戻せるのだ。

だからそう、翼さん……

「翼さんを言いなりにしようとは思っていませんよ。ただ、素直になってほしいだけです」

そのためにはあの瞬間——出会った瞬間をきちんと思い出してもらえれば良いのだ。

玲子は翼との時間に思いをはせ、にっこりとほほ笑んだ。

これはある事件が解決したその後。どこにも残されていない記録。

不運にも遺された白浜家の艶やかな継母と息子が、和解へと至る記録である。